あの夏　1989年　決勝　帝京×仙台育英　1

あと27メートル　逃した東北の夢

1989年8月22日（火）決勝　時間 2時間32分（12時30分～15時2分）　観衆 4万人　審判 本郷／片岡／広沢／相沢

		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	計	盗塁	失策
帝京（東東京）		0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2	0	0
仙台育英（宮城）		0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2

帝京　前田三夫監督（40）

				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
〔左〕	蒲生 弘一	主将 3年		三振		二直			三振		遊ゴ		四球
〔二〕	中村 英則	2		三振			四球		遊ゴ		三振		一犠
〔一〕	鹿野 浩司	3		左飛			二併		左安		遊失		中安
〔投〕	吉岡 雄二	3			二飛		三振		三失		三ゴ		三併
〔右〕	池葉 一弘	3			投ゴ			三振	遊ゴ			左安	
〔三〕	田島 拓也	3			一邪			右安		投ゴ		投犠	
〔遊〕	冨沢 仁	3				一ゴ		右安		遊安		遊ゴ	
〔中〕	成沢 勇人	3				四球		右飛		三邪		二ゴ	
〔捕〕	井村 清治	3				三振		右飛		三振			中安

仙台育英　竹田利秋監督（48）

				1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
〔左〕	大山 豊和	2年		三振		三振		右飛		遊ゴ		中三	
〔遊〕	茂木 武	2		死球		二飛			投ゴ	三振		一飛	
〔投〕	大越 基	3		遊ゴ			右安		中安		左安		三ゴ
〔捕〕	佐藤 博信	3		右飛			一犠		遊ゴ		投犠		三振
〔一〕	藤原 伸行	3			三振		三振		右安		遊ゴ		右二
〔二〕	村上 重寿	3			三安		三振		右飛		死球		
打	吉田 尚一	3											三振
〔中〕	高橋宗一郎	2			一ゴ			投ゴ		三振	遊ゴ		
〔右〕	山崎 長寿	3			二ゴ			投ゴ		右安		二飛	
〔三〕	山口 貴史	3				三ゴ		四球		一安		左邪	

打点

吉岡	
投球回	10
投球数	126
打者	42
被安打	9
奪三振	9
四死球	3
自責点	0

大越	
投球回	10
投球数	136
打者	40
被安打	7
奪三振	8
四死球	3
自責点	2

その瞬間、仙台育英は、みちのくの夢に急接近した。

0－0の九回裏だ。2死から大山が右中間を破る三塁打。両チーム初の長打に、2年生は何度も右腕を突き上げた。彼が約27㍍先の本塁を踏めば、サヨナラで春夏合わせて東北勢の初優勝――。その予感に甲子園は沸き立った。

宮城勢初の決勝だった。昭和から平成へと移った最初の夏、深紅の大優勝旗が初めて白河の関を越えるか。NHKのふるさとリポーターとして仙台育英に密着した島田政男は試合前、興奮気味に伝えた。「高校野球の歴史が大きく塗り替えられる。そんな期待と興奮が、このアルプススタンドに秘められています」

帝京の遊撃手冨沢は言う。「対戦が決まって、まず大越を思い浮かべました。気迫ですごい球を投げてましたからね」。4連投の大越と帝京の吉岡がゼロを並べていった。

そして九回裏、2死三塁。騒然とする中、茂木が右打席へ。宮城県南部、白石市出身の2年生。身長は吉岡より19㌢小さい167㌢だ。ここまで3打数無安打。「守備の男」は、弱気になっていた。

「正直、代打と思いました。その時点で負けですよね」

吉岡は八回まで、4度も得点圏に走者を背負った。しかし、常に落ち着き払っていた。「ヒットにされたのは置きにいった球か、抜けた球だけ。100％で投げれば打たれない自信がありました」

初球は外角へ球威のある直球。ストライク。次打者の大越はここまで3安打。寮で同室の後輩に念を送った。「当たれ。デッドボールで俺に回せ」。2球目は胸元への直球。どん詰まりの打球は一塁手鹿野のミットに。延長だ。疲労困憊の大越は気持ちを切り替えられない。十回表、鹿野の決勝打で、帝京が春夏合わせて初の頂点に立った。

九回裏のシーン。三塁にいた大山が長年の疑問を口にする。「あまりに淡々と流れたんです。代打もあったし、茂木ならセーフティーバントも。サードの田島さんの守備位置が深かったですから。茂木に声もかけなかったし、決勝だけは普段の竹田先生とは違った気がします」。ほかの場面でも、大山以外の当事者から同じ意見を聞いた。

仙台育英を率いた竹田は九回裏の映像を見て、「茂木には迷いがあった。しっかり声をかけてやれば、気持ち一本でいけたはずです。本来の私じゃなかった」と悔やむ。

この前年の春のこと。竹田は選手たちを連れ、選抜大会決勝を観戦した。その観客席で、竹田は大越に言った。

「一度は決勝の采配をしてみたいもんだ」。大越の胸にはずっと、この言葉があった。

そして東北（宮城）の監督時代を合わせて春夏通算20回目の甲子園で、初めて決勝へ進んだ。竹田は言う。「選手がワイワイとなるだろうから、私はどっしり構えていよう、と思っていました。その結果、試合に入り込んでいけなかった。動でなく、静でいきすぎた。最大の敗因です」

誰よりも東北勢初優勝に燃えていた男は、ようやく手にした大一番を大事にするあまり、一歩引いてしまった。再び決勝の采配を振るうことなく、竹田は95年夏の甲子園を最後に高校球界を去る。最後のお立ち台で「甲子園に忘れ物はありますか」と問われ、苦笑いで答えた。「ひとつだけ、あるんですけどね」

○

平成元年の夏、私は大阪の高校3年生だった。春でサッカー部を引退し、なんとなく受験勉強をする日々。テレビをつけると、同じ高校生たちが躍動していた。例年以上にまぶしく映った。あの夏の主人公たちを訪ねた。

＝敬称略（篠原大輔）

東北勢 決勝での成績

	東北勢	スコア	対戦相手
第1回大会（1915年）	秋田中（秋田）	● 1－2 ○	京都二中（京都）
第51回（1969年）	三沢（青森）	0－0	松山商（愛媛）
		● 2－4 ○	
第53回（1971年）	磐城（福島）	● 0－1 ○	桐蔭学園（神奈川）
第71回（1989年）	仙台育英（宮城）	● 0－2 ○	帝京（東東京）
第85回（2003年）	東北（宮城）	● 2－4 ○	常総学院（茨城）
第93回（2011年）	光星学院（青森）	● 0－11 ○	日大三（西東京）
第94回（2012年）	光星学院（青森）	● 0－3 ○	大阪桐蔭（大阪）
第97回（2015年）	仙台育英（宮城）	● 6－10 ○	東海大相模（神奈川）

決勝で敗れたあと、マウンドの土を集める仙台育英の大越＝1989年8月22日

全国高校野球選手権大会の名場面を振り返る「あの夏」の第13シリーズ、1989年の第71回大会決勝「帝京―仙台育英」は、5月20日まで計34回（原則火～土曜日に掲載）を予定しています。